

「憎しみの連鎖を越えて」

岩見三内中学校 3年A組 石 塚 蒼 優

僕の曾祖父の名前は石塚金吉と言います。曾祖父は太平洋戦争に出征し、終戦後捕虜になりシベリアに抑留されました。シベリアはとても寒く作業も辛かったけれど、何よりも辛かったのは食べ物がなかったことだったそうです。ネズミを食べたり、少し汚いですが、自分の小便を飲んだりしたそうです。終戦から3年後やっと日本に帰れました。

曾祖父には弟がいて、名前を銀吉と言います。銀吉は1944年11月にパプアニューギニアで戦死しました。24歳でした。戦死の知らせを聞いたとき、祖父はまだ5歳でしたが泣き崩れたそうです。僕がこの話を聞いたのは中学2年の時です。授業で太平洋戦争のことを習ったので興味がわいて祖父に尋ねたところ教えてくれました。そのとき僕は、自分が曾祖父の立場だったら生き延びることができただろうか、と思いました。また熱帯のジャングルで24歳という若さで死に直面した時、どんなに無念だっただろうかと胸が痛みました。敵国を憎く思いました。

ところが先日、僕は日本軍も同じような酷いことをしていたことを新聞で読みました。密林の中、1000人以上の捕虜を260km以上裸足で歩かせ、そのうち生還したのは逃亡した6人だけだったという「死の行進」です。生還した内の一人、オーストラリア人のウィリアムさんは戦後重度の神経障害を患い、浴びるように酒を飲んで家族に暴力を振るい、48歳で自殺したそうです。彼の息子は子供のころ、父を「壊した」日本人を憎んだそうですが、しかし、大人になって仕事で日本人と関わるようになると、その親切を受けて気持ちが、変わったと言います。

戦争は人を狂わせます。平和な時なら親切な人でも、ひとたび戦争ともなれば残虐なことをしてしまいます。そして被害を受けた側の憎しみは、何世代にもわたって連鎖します。

太平洋戦争が終わって81年。悲惨な戦争の記憶を受け継ぐと共に、今こそ他国の人と直接関わって相手を理解し、憎しみの連鎖を乗り越えていく時だと、僕は思います。